

マルセル・プルナン著 勝谷在登譯 「ダーウィン傳——生涯と學說」 白揚社版 昭和十三年

本書は“Socialisme et Culture”叢書の一冊 Marcel Prenant: Darwin (Paris, E.S.I., 1938) の前三分の二の評傳の部分の翻譯である。残り三分の一はダーウィン及びウォーレスの著書からの拔萃であつて、既に邦譯ダーウィン全集の出版されつつある關係上本譯書では除かれてゐる。

本書の内容は 第一章 ダーウィンの時代のイギリスの社會狀態、第二章 ダーウィンの家系と彼の生涯、第三章 ダーウィンの勞作の概觀、第四章 ダーウィンの進化論と自然淘汰説、第五章 ダーウィン及びウォーレスと人間の動物の起源、第六章 ダーウィンの功績、第七章 ダーウィンの缺陷の七章よりなり、別に參考文獻、人名及び科學用語解説を添へてある。

原著者プルナン氏は佛蘭西ソルボンヌ大學の生物學教授であるが、本書のダーウィン傳として特異な點はここに示した目次によつてもうかがはれる如く、著者は英雄主義的な歴史觀を捨て、「普通の傳記物語に見られるやうに先づ個人的な傳記、私生活の敘述からはじめず、「ダーウィンを論ずるに先立つてダーウィンを生んだイギリスに於ける資本主義の發達を分析」(譯者序)してゐる(第一章)。然る後第二章に於てダーウィンの歴史的社會的位置を論じ、彼に於ける進歩的な面及び消極的な面の依つて來る所以を明かにしてゐる。第三章に於ては彼の諸勞作を概觀し、彼が「あらゆる部門に於いて殆んど缺點のない不朽の名著を残し」「これこそはこの優れた觀察者の才能を證明するものである」(104 頁)ことを示し、又第四章では彼の自然淘汰説の出現は、彼の天才を無視するわけにはゆかないとしても、如何なる國に於ても可能だつたわけではなく、マルサスの「人口論」を生んだと同じ當時の英國の社會的地盤を必要としたのであつて、こうして見る時彼の説とウォーレスの説が一致したといふことは必ずしも偶然ではなく、そのことは「狹隘な生物學的環境の雰圍氣よりも寧ろ資本主義的な一般環境の雰圍氣のうちに、この思想が醸成されたことを證明するもの」(123 頁)であるといつてゐる。尚以下の諸章に於て人間の動物の起源といふ點では當時の進化論者は一樣に一致してゐたが、人間への進化を論ずるにあつて「ダーウィンは人間のあらゆる性質を動物と同じ平面に立つて取扱はうとした爲失敗し」(222 頁)、その點ウォーレスは「『勞働手段の使用及び創造は、既に動物に於いてその萌芽が見られるとはいへ、それは特に人間勞働の過程を特徴づけるものである』といふ考に近づいてをり」、「鋭智及び道具の出現が人類の進化にもたらした變化を強調した」といふこと(143, 148 頁)、その他のダーウィンに於ける缺陷をも、彼のもたらした偉大な功績と共に鋭く分析してゐる。又各國に於けるダーウィニズムの消長がその國の社會狀勢の變化と如何に關聯してゐるかといふやうなことが興味深く述べられてゐる。

本譯書には原著に無かつた圖が幾つか挿入されてゐる。尚繙讀に直接影響のないことではあるが挿入の外國語の誤植が少なからず氣に懸る。(雄井益雄)

Ergebnisse der Enzymforschung herausgegeben von F. NORD und R. WEIDENHAGEN
Bd. VII, 1938, Leipzig, Akademische Verlagsgesellschaft M.B.H. 437 頁

逐年發行される本書が酵素それ自身の研究者には勿論の事それ以外の一般生化學の仕事に携はる者に取つても最近の學界の趨勢を展望するに必要缺くべからざるものである事は言を俟たない。執筆者も各分科に於ける専門家であり、斯學の綜説の粹を集めたものと云へやう。繁を避けんがため一々の内容に立入らず單に表題と執筆者を並べ參考に供しやう。

A.E. STEARN: The theory of absolute reaction rates applied to enzymic catalysis.

E. BAMANN u. W. SALZER: Lyo- und desmo-Enzyme.

Cl. FROMAGEOT: Sulfatases. ここには種々の有機硫酸エステル分解酵素が詳述されてゐる。これ等の酵素の中には本邦人に依つて發見されたものがある。即ちフェノール硫酸エステル酵素は 1923 年 NEUBERG と黒野氏に依り、葡萄糖硫酸エステル酵素は 1931 年 左右田、服部兩氏に依つて蝸牛に發見されたものである。